

第 4 卷

目 次

エッセイ

レマン湖畔での論争

崔 殷範(チェ インボム)

朝鮮総聯の皆さん、偽善によらず良心に
生きよう！

金民柱(キム ミンジュ)

フォーラム

凍土の北朝鮮に殺到した在日朝鮮人

李洋秀(イー ヤンスー)

証言

収容所で会った帰国者と日本人妻

安赫(アン ヒョク)

資料

北朝鮮帰国事業と私の責任

金昭平(キム ソビョン)

写真集『北帰行』より (省略)

活動記録(1997年4~6月)

北朝鮮帰国者の生命と人権を守る会の活

動

北韓同胞の生命と人権を守る市民連合の

活動

エッセイ

レマン湖畔での論争

崔 殷範(チェ インボム)

(前大韓赤十字社人道法研究所長)

1950年代末、在日同胞北送問題が論議されだした頃、私は大韓赤十字社の若い職員であった。その時わが国は、在日同胞の北送だけは絶対に阻まねばならぬという熱気でカッカッと煮えたぎっていた。国内では政府と大韓赤十字社を始めとする民間団体が一丸となって至る所で大規模な抗議集会を開き、また路地や職場で

は北送に反対する百万人著名集めキャンペーンが展開された。また国外では当時だけに限って言っても、極めて微弱であった国力を一つに結集し、関係国際機構を相手にロビー活動をねばり強く展開していたのである。

ロビー活動の主たる対象は国際赤十字委員会 (ICRC) であった。ICRC が日本側の主張に同情して乗り出してくる公算が大変大きかったためである。この時スイスから聞こえてくるニュースによれば、日本赤十字社の井上外事部長は、何ヵ月か単位で滞在しつつ ICRC の中枢的幹部たちと持続的に接触していたのである。しかし、我々の側としては ICRC の動向に神経をとがら

せるほかなかった。代表団の派遣と手紙の送付は主に ICRC にねらいを定めて進められた。

ICRC の雰囲気は日本側に有利に展開した。ICRC が「個人の自由意思を確認する仕事」に関与しなければならないという所に意見が集中していったのである。我々側からみると、これは日本政府の在日韓国人追放を ICRC が合法化する便宜主義的な手続きにすぎなかった。

わが方の代表団は ICRC 幹部たちと接触しつつ、まさにその点を鋭く指摘し、ICRC の北送問題介入に強く反対した。私

は李範錫氏*を団長とするわが国代表団
と ICRC 幹

部との次のような論争を今も生々しく記憶
している。

*** 李範錫 当時大韓赤十字社青少年部
長**

**兼ソウル支社事務局長。のち南北間赤
十字会談本会談韓国赤十字側首席代
表、インド駐在大使、外務部長官などを
歴任。1983年アウンサン廟爆破テロ事件
で殉職。**

**韓赤側:いろいろな状況に照らしてみると
き、この事業には在日韓国人を追放する
日本政府の企図がはっきりとあらわれて**

いる。またこの問題をめぐって南北間の利害が対立している。このような政治的な問題に ICRC が介入したことは、中立の原則に違反すると考える。

ICRC 側：そうではない。我々は政治的問題には厳正中立の原則を守る。ところで、個人がどこに行くかということは、本人の自由

意思で選択する問題だ。そのために我々は個人にどこかに行くように勧めることもできず、またどこかに行こうとするのを、行ってはならないと阻むこともできない。

韓赤側：(指で窓の外を示しながら)あそこ

に美しいレマン湖水がみえる。ところで、あの湖水の水の中へ幻覚状態に陥った恋人二人が手に手をとって入って行こうとしていると仮定しよう。放っておいたら二人は溺死してしまうだろう。それにも拘わらず、我々は当事者たちが自由意志で選択したという理由で、放っておかねばならぬというのか。それは人道主義の真正な目的に反する行動である。

送還希望者の自由意思確認手続きにかければ、北韓に送ってもよいという ICRC の立場は、湖水の中へ歩いて行く二人の恋人を放置しておくのと同じだ。北韓は共産党が統治する地獄のような所ではないのか。この問題に対する ICRC の立場は、

赤十字運動の基本原則である人道性 (humanity) に違反するというのが我々の考えだ。

ICRC 側：どこが天国でどこが地獄かを判断することは、我々の役割ではない。赤十字運動は政治的・理念的論争に介入してはいけない。

このように韓国の朝野が強力に反対したにも拘わらず、ICRC は北送事業に引き込まれていき、日本側は在日韓国人 10 万名を北送船に乗船されることに成功した。この時日本人妻 1828 名が夫について北韓に渡っていったことが知られている。

ところで胸が痛むのは、彼女らの中で 1 人も日本にいる親戚を訪問できずにいる事実である。北送事業の初期から数えると 30 数年という歳月がその間流れた。どうしてこのようなことが 20 世紀の文明時代に存在しうるというのか。彼女らが北韓の土地で経験している険(けわ)しい生活はしばらく置くとしても、これは「自分の出身国へ帰る権利(a right to return to their countries of Origin)」という基本的権利に対する侵害以外の何物でもない。

この間北日（朝日一注）国交正常化交渉で日本人妻の帰省(里帰り)問題が日本政府によって間歇(かんけつ)的に提起さ

れたことがあったが、赤十字社次元では今まで提起されたことがないようだ。このような人間悲劇を前にして、私は悲劇の原因提供者である日本赤十字社と ICRC がそのとき合作して作り出した論理が果たして妥当であったかを彼らに問わざるをえない。また日本赤十字社と ICRC が不幸な日本人妻たちの悲願を実現させるために、この間どのような努力を払ったかを問わないわけにいかない。

(編集者注) 編者が去る 5 月中旬ソウルを訪問した際、韓国の市民連合の新しい協力者の人たちとお会いする機会があった。本エッセーの筆者崔殷範氏もその一人で

あった。その席上崔氏から日本赤十字社は帰国者の人権問題解決のため何をやって来、今何をしていますかと質問を受けた。大変消極的ですと答えるしかなかった編者に対し、崔氏はレマン湖畔での論争のエピソードを語って下さった。大変貴重な内容であったので、一文を所望し、このエッセーが誕生した。

エッセイ

朝鮮総聯の皆さん

偽善によらず良心に生きよう！

金 民 柱

(北朝鮮帰国者の生命と人権を守る会共同代表)

北朝鮮の最近の食糧事情について、新聞紙上に報道されない日はない。総聯の皆さんは「今世紀最大の水害による被害」だと言いつくろっているが、正直いって「主体農業」

とかの農業政策の失敗による構造的な被害であることは明らかだ。一度でも北朝鮮を訪ねたことのある総聯の人士であるならば、百も承知のことである。

住む地域によって食料の配給量がことなると言われる北朝鮮で、とくに地方都市に住まわされている日本からの帰国者たちの生活は、絶望的な状況に置かれているという事実を一番知っているのもまた、総聯の方たちである。日本からの仕送りのな

い帰国者は、さらに悲惨である。これらの事実を否定する人は、真に祖国の未来と民族の将来を案ずる良心的人間とは言えない。

古い話だが私は、生前の韓徳銖夫人の帰国した妹さんから韓徳銖夫人への援助を乞う手紙を、常盤台の家へ届けたことがある。夫人は当初、そんな妹はいないと言いつ張っていたが、秘書を通じてその手紙を受け取った。

私は今年に入って偶然にも、北朝鮮から三通の郵便物を受け取った。そのうちの一通は私の生かされている弟からのものだが、後の二通は差出人の名を見る限り未知の人からの手紙だった。開封してははじめ

て北にいる知人の家族からのものだと分かった。一人は朝鮮動乱時に南から北へ行った友人の家族からであり、もう一通の方は東京から帰国した幼友達の家族からのものだった。

いずれの手紙にも最近の北朝鮮の現況にふれながら、わずかでもいいから援助してほしいという、涙なしには読めない内容の手紙である。そのうちの一通には、切々たる文面に“いったい、この国の将来はどのようなのでしょうか”とあった。

それぞれの父親は私の幼時からの友人である。南から北へ行った友人は北朝鮮のある地方都市の党機関の部長職にあった人で、なぜか「強制収容所」に送られて

八 年代後半に死亡した人である。彼は南労党员だった。もう一人のほうは東京都台東区に住み、「アメ横」の貴金属店で働いていたのだが、北に行って大学へ進学したいと希い家族と共に帰国した。日本にいる時からW大学の講義録を取り寄せ、独学するほどの勉強家であった。間もなく父親が病死するという気の毒な経過をたどり、五人兄弟の長男であったが、働き手がないということで進学できず、一家の生活のため働かなければならなくなった友人である。したがって、そのお子さんたちと私は一面識もない。彼らにしてもまた同じである。

どのような経路で私の住所を知り得た

のか知る由も無いが、一家の延命をはかるために僅かな望みを賭けて「SOS」を発信したことを考える時、胸のつまる思いである。

いま、日本赤十字社には、北朝鮮から親類縁者の所在確認を依頼する手紙が八千余通にも達しているという。なぜ「朝鮮総聯」ではなく赤十字社なのか。それは言うまでもなく「朝鮮総聯」が金正日体制べったりの御用団体になりさがり、信頼できないという証拠の現れであるからだ。

北朝鮮にいる帰国者は誰一人として、「朝鮮総聯」を憎んでいない人はいない。「朝鮮総聯」は、帰国事業開始以来四 年

におよぶ今日まで、一度でも帰国同胞の生の声を聞いたことがあっただろうか。北当局から一方的に与えられる捏造された記事だけを、『朝鮮新報』やその他の出版物に「何不自由なく幸せに生活している」と偽善の宣伝につとめてきたにすぎない。

私の弟泰元は、『労働新聞』紙上において“帰国して何不自由なく勉学にいそしんでいる”と、写真入りで紹介されたが、スパイの嫌疑をかけられ「強制収容所」に送られ、そ

こで無念にも、ペラグラ病で死んだことを確認している。その妻は強制離婚させられたし、二人の子供がいたが、それぞれ養子に出されてしまったという。

私は所轄の新宿支部を通じて何度も、朝鮮総聯に調査を依頼したが「一個人の死について国家がいちいち通報の義務はない」と、口頭で伝えられただけで、真っ当な返事をもらうことができなかった。

この場をかりて、もう一度朝鮮総聯に要請したい。温かい親の下で何不自由なく勉強していた弟を誑かして北朝鮮へ連行していった張本人は「朝鮮総聯」ではないか。

生まれ故郷の済州島には、いまだに息子の死を知らずに病床に臥している老母がいる。なんと母親に知らせて良いというのか。せめて遺骨だけでも送り返してほしい。

弟が「唯一の祖国」だと信じて帰国してい

った北朝鮮。その「祖国」に裏切られ、あげくの果てには殺された。このような非業の死をとげた人は私の第一人だけにとどまらず、数多くの犠牲者がいるということは、ほかならぬ「朝鮮総聯」が一番良く承知していることではないか。

最近「朝鮮総聯」では、北朝鮮での水害による被害への救援活動を大々的に展開していると聞く。それも結構なことだが、いままっとも援助を必要としているのは、この日本に縁者のいない帰国者たちである。異国日本に於いて民族的蔑視と差別に耐えかねて、希望の地として夢を膨らませて帰っていった“楽園”であるはずの国で、異国での生活よりも酷い境地に追いやられ

疎外され、いわれのない差別によって呻吟している帰国者たちを「朝鮮総聯」は先ず救援すべきである。

金日成ですらはばかって使わなかった「地上の楽園」という言葉を、臆面もなく韓徳銖は一九五八年五月の第四全大会で使用し、帰国運動を煽り、10 万に及ぶ同胞を北の労働力として帰国せしめた。民族的良心があるなら、今からでも遅くはない。

彼ら帰国者の悲痛な叫び声に耳を傾けてほしい。

フォーラム

凍土の北朝鮮に殺到した在日朝鮮人

李 洋 秀(イー ヤン スー)

(北朝鮮帰国者の生命と人権を守る会 事務局長)

はじめに

古代ローマ時代公共広場「フォルム」を語源とするフォーラム・ディスカッション＝公開討論会の議題に、今回は在日朝鮮人の北朝鮮帰国問題がとりあげられることになった。

この問題を現在取り上げるのは、まさに渦中であるが故に議論も百出するだろうし、立場もそれぞれ異なるだろう。したがっ

て、この拙文は私個人の見解であることを、予めお断りしておく。

それにしてもあの時代、それも戦後復興した日本から、朝鮮戦争で焼け野原となった貧しい北朝鮮へ、なぜあれほど多くの人
が渡って行ったのか？

帰国事業が末期を迎え、数字合わせに送り込まれた一部の若者を除き、帰国事業が韓国のラジオが放送する「20 世紀の奴隷船・北送船」だったという表現に、私はどうも違和感を感じる。

1959 年 12 月 14 日から始まった帰国運動のあの熱気を、いまどう説明したら良いのだろうか。朝鮮戦争は神武景気と呼ばれる「特需」を日本にもたらし、日本が経済的

に大復興をするキッカケを造った。出身地の 97%を現在の韓国に置く在日朝鮮人が、朝鮮戦争で廃墟になった北朝鮮へなぜ帰国したのか？それも自分の故郷ではない見ず知らずの土地へ、なぜ多くの人
が渡って行ったのか？

彼らは(私も含めて)、社会主義祖国の建設に夢と希望を抱いて海を渡ったのだ。日本での民族差別と決別し、差別のない「地上楽園」へ自分の人生を託したのだった。それがこんな「地獄への片道切符」に終わろうとは、その時誰が想像しただろう。「人道主義」の旗の下、善意を持って送りだした進歩的な日本人。

そして何よりも二度と戻れないことを言

い含められ、帰国した瞬間「騙された」と分かり、地団駄を踏んだ帰国者当人。帰国者を人質にとられ、仕送りで財産を使い果たした、日本に残った帰国者の親族。帰国運動とは一体、何だったのだろうか。いま私たちはこの現実を前に、何をすべきだろう。

戦後の在日朝鮮人

第二次世界大戦後の朝鮮半島は 38 度線を挟み、米ソ東西両陣営が対峙した。朝鮮半島が分断された直接的な原因は、米ソ両駐留軍による合意だが、間接的な責任は日本の植民地支配にある。なぜなら

ば 1945 年 2 月の米英ソのヤルタ秘密協定で、ドイツ降伏後三ヵ月以内のソ連軍参戦が決められ、ソ連軍は偽「満州国」駐屯の日本陸軍と、米軍は 38 線以南の日本陸軍(朝鮮軍)と戦うことになった。

つまり日本が決めた責任境界線 38 線が、現在の南北朝鮮の分断の下地になってしまった。1)これはいまでも朝鮮・韓国人の、日本の植民地支配に対する心のしこりとして残っている。かくして朝鮮半島は分断された。

在日朝鮮人は 1945 年 10 月 15 日、「在日本朝鮮人連盟」(朝連、委員長尹権ウン)を結成した。だが結成当時の朝連

は、政治的色彩より、在留同胞の生活安定と帰国同胞の便宜と日本人との友誼など、素朴な目的を掲げていた。2)

まもなく朝連が日本共産党の影響下に入ったことから判るように、当時の日本の政治の雰囲気、社会運動の傾向は左翼的で、社会主義陣営に親近感を覚える傾向だったので、朝連の親共路線に反対する人たちは、1946年10月3日「在日朝鮮居留民団」(団長、朴烈パクリョル)を結成する(現在の大韓民国民団)。3)

1)1981年社会評論社、高峻石(コジ ユンソク)監修、文国柱(ムソクッチユ)編著『朝鮮社会運動史辞典』p143～144

2) 上記『朝鮮社会運動史辞典』p432

3) 上記『朝鮮社会運動史辞典』p442 ~ 443

しかし第二次大戦直後 200 万以上いた在日朝鮮人の多くは、既に朝鮮半島に帰国していた。日本に帰って来る日本人を乗せた引揚船に乗り、1946 年 2 月までに朝鮮半島に帰った人の数は約 94 万、正規のルート以外の仮船 4) 等により帰った者は約 40 万、計 134 万と推定されている。5

1946 年 3 月厚生省は GHQ の指示に基づき、引揚希望者の数を調査した。結果は全在日朝鮮人数 647,006 名、その内、帰還希望者は 514,060 名。その中で、北朝鮮

への帰還希望者は 9,701 名。引き続き日本に残留することを表明した者は一万人余に過ぎなかった。

しかも北朝鮮への帰還希望者は、続く 1947 年 1 月 31 日の調査では 1,413 名に激減した。

そして、現実に北朝鮮に帰ったのは、佐世保から興南(現在は咸興市に合併)に渡った 351 名(1947 年 3 月 15 日大安丸 233 名、6 月 26 日信洋丸 118 名)に過ぎなかった。⁶

そして、1947 年 2 月から 1950 年 5 月までの間には、16,990 名が佐世保から韓国(1948 年 8 月国家創建)へ引き揚げた。

ただ折しも朝鮮戦争が勃発し、舞鶴から北朝鮮へ引き揚げようとしていた 627 名は日本残留を余儀なくされた。したがって戦後の引揚で本当に北朝鮮に帰国しそびれたのは、この 627 名の北朝鮮出身者だけだった。⁷ これで解放(終戦)直後の北朝鮮帰国は一旦終結を見る。

だが時の首相吉田茂は朝鮮人に対する大変な差別意識の持ち主で、朝鮮戦争が勃発するや「日本にいる朝鮮人はみな韓国に送り返したい。」と、ダレス米国務長官に申し込む始末であった⁸)。相談された方もさぞ当惑しただろう。一国の首相ともあろう人が、戦争中の国に「敵を支持する人間を 60 万人も送り込む」など、狂気の沙

汰ということに気がつかないのだから。

日赤と国際赤十字社の介入

日本赤十字は、朝鮮戦争が休戦してまだ半年も経ってない 1954 年 1

4) 1958 年 5 月 20 日改訂再版、日本赤十字社発行冊子『一部在日朝鮮人の帰国問題』P3。原文のままだが「仮船」とは、当時多く出沒していた詐欺行為同然の未公認違法の船を指すようである。

5) 上記『一部在日朝鮮人の帰国問題』P3

6) 上記『一部在日朝鮮人の帰国問題』P6

7) 上記『一部在日朝鮮人の帰国問題』P8

月、既に在日朝鮮人の北朝鮮帰国に関して、「もし朝鮮赤十字が北朝鮮に残留している日本人の帰国を援助してくれるならば、日本にいる朝鮮人で北朝鮮に帰りたい者の北朝鮮帰国を日本赤十字が援助する」と、北朝鮮の赤十字会に申し入れていた。

9

1956年1月28日から2月28日まで平壤で開かれた日朝赤十字会談では、「在日朝鮮人の帰還問題の解決は、人道主義的両国赤十字団体の切実な関心事として残っている」旨、共同コミュニケに明記された。在北朝鮮日本人の帰還には、海上保

安大学所属練習船の「こじま」(1020 トン)が決まり、北朝鮮側の港としては咸鏡南道遮湖港が指定された。10 ところが 1956 年 4 月 17 日出港の「こじま」に乗せて北朝鮮に帰国させろという在日朝鮮人が、4 月 6 日から日赤本社に天幕を張り、座り込みを 6 月 18 日まで続けた。

この帰国希望者 48 人は、紆余曲折はあったが、20 名が 12 月 20 日門司発のノルウェー船ハイリー号で上海経由で帰国し、残りの 28 名は 1957 年 3 月 31 日博多から日本の漁船に乗り、4 月 4 日清津に到着した。11)

おりから 1956 年 4 月 30 日から約一ヵ月間、日本と韓国を訪れていた赤十字国際

委員会極東調査団のウィリアム・ミシェル (William Michel)、ウジェーヌ・ド・ウェック (Ugenede Wech) 両代表が、釜山の日本人漁夫収容所と大村(長崎)の朝鮮人・韓国人抑留者収容所を視察し、日赤に立ち寄った。その時、上の帰国希望者一団を目撃し、関連資料を集めた。

そして国際委員会は「純粹に人道的立場から」、在日朝鮮人の北朝鮮

8)「吉田首相は、ほとんどすべての朝鮮人を『本国』へ送還したい、と述べ、政府は長い間にわたり彼らの非合法活動を憂慮してきた、と述べた。また首相は、この問題をマッカーサー元帥にもちかけたが、元帥は彼らのほとんどが北朝鮮人(親北朝鮮

人の間違い)であり、大韓民国により『殺されてしまうかも知れない』ということのひとつの理由として強制送還に反対した、と述べた。さらに吉田首相は、1949年夏の国鉄総裁の暗殺は、朝鮮人によるものであると政府は決定しているが、犯人を捕らえることができず、犯人は朝鮮に逃亡したものと確信する、と述べた。」1952年4月23日吉田茂 = ダレス会談、the United States . 1951 . vol . , Washi n g o n . 19779)1954年1月6日附外第72号朝鮮赤十字あて電報、日本赤十字社「社史」稿第7巻、1986年版、P18810)1972年『日本赤十字社社史稿』第6巻 p26811)上記『日本赤十字社社史稿』第7巻、P178 ~ 179

帰国事業に「介入」することを決意し、同年 7 月 16 日赤十字国際委員会レオポルド・ボアシェ (Leopold Boissier) 委員長は、日本、韓国及び朝鮮の各赤十字社宛に、書簡と覚書を送る。¹² 朝鮮赤十字会は 1956 年 3 月 15 日日赤宛の電報で、「大村収容所を含む在日朝鮮人に関する一連の諸問題の解決が、両国赤十字社の関心事として残っている事実を考慮し、朝鮮赤十字会は、貴社(日赤)が在北朝鮮日本人帰国のための船を利用して、帰国希望収容者の帰国をご按配して下さることを期待します。」¹³ と、大村収容所の被収容

者に関心を表明する。日赤井上外事部長は 1958 年 7 月 3 日の衆議院外務委員会で、大村の収容者の北朝鮮帰国問題を人道問題として取り扱ったが 14)、70 人の収監者の北朝鮮帰国希望者が契機になって、数年後の 9 万 3 千人の帰国に帰結した考えるのは、私には納得が行かない。

総聯の大宣伝

1959 年 12 月から始まった帰国事業の背景を考えると、これを日本で推進した朝鮮総聯という組織の性格をしっかりと押さえることが大切である。今解放後の在日朝

鮮人の組織の変遷をたどることは、本稿の主題でもないし、またスペースもないが、最小限次の脈絡だけは見ておきたい。

1949年9月8日GHQの指令のもとに朝連が解散されると、在日朝鮮人は1951年1月9日「在日朝鮮統一民主戦線」(民戦、議長金薫キムフン)を組織する。民戦は朝連時代の延長で、当初まだ日本共産党の指導下にあったが、1953年11月民戦第四回大会以降北朝鮮の影響が強まってくる。そして在日本少数民族論の民族対策部(朝連解散のあと1949年12月日本共産党中央に設置)の中心人物であった金天海(キムチョンヘ)、金斗鎔(キムドゥヨン)、朴

恩哲に対して、韓徳銖(ハンドクス)を中心とする北朝鮮支持派は、民戦を発展的に解消させ、1955年5月25日「在日本朝鮮人総聯(総聯)」を発足させる。15 その当時北朝鮮は、朝鮮戦争後の

12) 上記『日本赤十字社社史稿』第7巻、P181

13 上記『日本赤十字社社史稿』第7巻、P179～180

14) 上記『日本赤十字社社史稿』第7巻、P189～190

15) 上記『朝鮮社会運動史辞典』p394～5

復旧事業に大量の労働力を必要としてい

た。朝鮮戦争に参戦した中国人民義勇軍を慰留したり、中国やソ連にいる朝鮮族に北朝鮮の戦後復旧事業に参加することを要請したのは事実だ。16

だが自由主義陣営に属し、前記特需で復興した日本から、多くの帰国者を迎える準備は北朝鮮側には余りなかったようだ。それは1955年9月29日組織結成から僅か4ヵ月後、総聯が派遣した林光澈(イムグワンチョル)と接見した金日成の話からも明らかだ。

金日成は次のように言っている。

「教育費を送る。奨学金を送る。総聯の活動を積極的に援助する。学生たちが祖国に来て勉強したいと期待するなら

引き受ける。 祖国に帰国を希望する同胞は、できるだけ帰国するようにさせる。
(中略)

これらの全ての問題は、日本政府とわが国政府間の平和共存に依る外交政策に立脚して解決するものなので、まず共和国(北朝鮮)政府は経済文化交流を促進する事業を展開するだろう。日本から追い出される形態の帰国はよくない。国家体面と民族的な誇り、将来の両国間の国交関係を冷静に考えなければならない。

いま祖国の人民もまだ生活が安定したとは言えないが、全人民が残らず再建に立ち上がり、皆希望に溢れている。われわれには困難なことが少なくないが、在日同

胞に援助をできるなら幾らでもする。」¹⁷

「まだ生活が安定したとは言えない」とか、後の「地上楽園論」とは大分違う、比較的現状を素直に認めている印象を受ける。

しかし総聯は違った。赤十字国際委員会と日赤の協力意思が明確になるや、総聯は帰国事業を全面に押し出す。思想統一工作という名称の下、韓徳銖が主導権確立を企図し、帰国をその主導権確立のための一つの道具に利用したと見ることもできる。¹⁸ 1958年8月12日神奈川県川崎市中留(なかどめ)分会の「祖国を知る会」で、金日成宛の手紙を採択し、帰国事業に本格的に取り組む。これは総聯中央李

珍珪教育部長(故人)が仕組んだ「ヤラセ」と現在では解釈されている。神奈川出身の韓徳銖と李珍珪が、神奈川で組織したから

16) 1997年5月「守る会」機関紙「カルメギ」13号、ロシア在住金マリアさんの証言

17) 1972年高麗大学校亜細亜問題研究所、田駿(チョンジュン)著「朝総聯研究」p290

18) 上記「朝総聯研究」p328

成功したとも、他の地では成功しなかっただろうとも言われている。この「ヤラセ」に対して、人々がそれに呼応しなければそれで失敗に終わるのに、この「ヤラセ」は大成功してしまった。

総聯は、北朝鮮からの「悪魔の囁き」を在日朝鮮人に届けた。

「白い飯に肉汁を食べ、瓦屋根の家に住み、ピロートの服を着る。完全看護の無料医療、最高学府まで進学でき、望む者はモスクワ大学に留学できる。平壤の高層アパートに住む労働者の平均月収は60ウォン程度だが、コメや魚など副食はふんだんに配給される(現在の北朝鮮の食料飢餓は、この時から徐々に始まっていた)。アパート代は月2ウォン程度で、光熱費、電気代もタダ同然、毎月貯金ができて、年に一月は温泉で有給休暇。生活用品は何でも全て揃っているから、帰国者は何も持たずに手ぶらで祖国の懐に抱かれれば

良い。」

この台詞に、当時の在日朝鮮人はコロリと騙されてしまう。「社会主義祖国 = 地上楽園」という殺し文句に、多くの在日朝鮮人は熱狂した。

「総聯は、1958年10月5日在日朝鮮人総数約61万人のうち、帰国希望者は1万7,130人¹⁹⁾」と発表する。

総聯の発表する数字は、「4万1,370人²⁰⁾から、約11万7千人²¹⁾」へと飛躍的に拡大する。

1958年5月27日から1959年5月10日の間に、総聯は大小1万2千回の集会を持ち、その総動員数は50余万名だった。北朝鮮の映画と中央芸術団の公演の延

べ参加者は80万を越えた。総聯の各傘下団体で配ったポスター、ピラ、チラシ、新聞、パンフレットなどの総数は千三百万部以上と報告されている。22) 日本の民間団体としては1958年11月17日、浅沼稻次郎(社会党)、石井漢(舞踏家)、岩本信行(自民党)、太田薫(総評)、風見章(日中国交回復国民会議)、城戸又一(東大教授)、下中弥三郎(平凡社社長)、野溝勝(全目農)、鳩山一郎(日ソ協会)、官本顕治(共産党)、山本熊一(日朝協会)、吉田正志(日青協)ら46氏が提唱者となって、「在日朝鮮人帰国協力会」が発足する。

23)

19)1958年10月21日アカハタ。1995年3

月 20 日文芸春秋社、鄭箕海(チヨ・ギヘ)
著『帰国船』p33220)1958 年 11 月 17 日ア
カハタ。

上記『帰国船』p335

21)1959 年 8 月 14 日朝日新聞社説。

上記『帰国船』p337

22)上記『朝総聯研究』p332

1959 年 2 月 13 日日本政府法務省、外
務省、厚生省は、在日朝鮮人の北朝鮮帰
還を日赤が赤十字国際委員会の協力を得
て行うと閣議了解で決定する。24 そして 4
月 13 日から 6 月 10 日まで 17 回、ジュネ
ーブでの日朝赤十字会談を経て、25 8 月
13 日インドのカルカッタで、日赤葛西副社

長と朝鮮赤十字会李一卿副社長は「日本赤十字社と朝鮮民主主義人民共和国赤十字会との間における在日朝鮮人の帰還に関する協定」に調印した。

26) もう猫も杓子も、「在日朝鮮人は全員帰国して、祖国の懷に抱かれる」そんな雰囲気になってしまった。

進歩的な日本のマスコミの北朝鮮宣伝

民団を除く日本中が、万歳の嵐と五色のテープで、鉄道各駅の帰国専用列車を見送り、帰国船を新潟港から送りだした。社会党、共産党などは機関紙で「人道主義に基づく北朝鮮への帰還事業を熱烈に支

持』したし、朝日新聞など大手の新聞、週刊誌、ラジオ、テレビ、映画は帰国を『美談』と奨励した。

海外旅行など日本人でも高嶺の花だったこの時代、在日朝鮮人が自らの祖国と信じる北朝鮮を直接訪れる機会はなかった。日本から香港、北京を経由して北朝鮮に入り、生の平壤の姿を紹介したのは、日本のマス

コミだった。その日本人の眼に、北朝鮮はどのように映ったのか？平壤がいくらソ連、東欧の援助により奇蹟的に復興したとはいえ、特需で発展した日本に比べてどうなのか？

本当に平壤の市街地は、東京より清潔で

立派な近代都市だったのか？心が曇って、まったく違って見えてしまったのか？それとも全部が、最初から真っ赤なウソで、汚いものを綺麗と言いくるめてしまっていたのか？

非合法の活動をしてきた旧朝連から民戦の歴史を持つ総聯の宣伝には、首を傾げた在日朝鮮人も、寺尾五郎の著書『38度線の北』（新日本出版社）や、朝日新聞などの北朝鮮賛美には、良心的な左翼の日本人が直接行って見てきたことを言うのだから、間違いないのだろうと信じ込んだ。

23)1958年11月17日アカハタ。

上記『帰国船』p334～5

24) 上記『日本赤十字社社史稿』

第7巻、P191

25) 上記『日本赤十字社社史稿』

第7巻、P195～6

26) 上記『日本赤十字社社史稿』

第7巻、P198～201。上記『帰国船』

p314～317。

日本のマスコミがどのようにその頃の北朝鮮を紹介したのか、当時の新聞記事などから観察して見たい。

【平壤 = 入江特派員発】平壤にある金日成大学は北朝鮮で最も有名な大学だ。1946年金日成首相の直接の発起でつくら

れ、平壤東北の丘の上にある。学生は四千五百、うち二割が女子。教授陣は三百余人、ソ連、中国、ルーマニアなどの外国学生が 44 人いる。この大学を訪問してみた。

学生の家庭は労働者、農民が八割、平壤以外の学生は全部寄宿舍、授業料は一切いらぬ。服装、夜具も国家からくれる。昨年までオーバーは綿入れだったが、今年になって全大学がラシャのオーバーに変えられた。

奨学金も出るので、金は少し余る。それを主に書籍、映画代などに使うそうだ。27

東海(日本海側)の朱乙温泉を拝見した。…職業同盟が各職場に割り当て、一

年一回 12 日間はタダで休養させる。昨年中に延べ十万人が保養したそうだ。…来た時に体重を計って、それよりふえなければ帰してくれませんネ。しかし規則正しい生活だから、まア、みんなふえますよ…

28

北朝鮮西海岸に近い黄海製鉄所に行った時である。労働者の主婦に会って家計簿を見せてもらおうじゃないかと記者団の間で話が出た。行き当たりばったりに一軒えらんで、中を見せてもらった。李さんという。

主人は工員で、奥さんは家にいた。

家賃と米代が非常に安いので毎月貯金ができるという。働けば食いっぱぐれはあり

ません、とごくあたり前に語った。29

産経新聞東京本社社会部の坂本郁夫
記者は「この国は社会主義である。

だから帰還者(帰国者)も、例外なく、その
能力、技術、知識を 100%発揮でき、生活
が急速に安定できるように、配置される。
教育については、これも政府の方針で、日
本の大学の学生だったものは、無試験で、
該当の大学に編入される。中学、小学生
については、語学の関係もあって、日本の
学年より、一年さげて編入される。つまり、
日本で高三だったものは、朝鮮の高級中
学二年に編

27) 1959年12月27日朝日新聞「怠け学生

なし、費用は全部国家で一金日成大学を
訪ねる - 」

28)1960年1月12日朝日新聞「割り当て
で無料温泉、社会主義的温泉 - 38度線の
北 」

29)1960年1月16日朝日新聞「働けば食
える 明日へ向ける目、浸透する政治 - 38
度線の北 」

入される。もちろん独身大学生用に、大学
の寄宿舍は空けてある。手抜かりはない。

帰還者が、新潟で船に乗れば、あとは、
ベルトコンベア式にスムーズにことがはこ
び、新潟出港後、十～十五日くらいで、北
朝鮮に安住の地ができる仕組みだ 30 」と

書いている。

この特派員たちは心の底から信じ込んで、この特集記事を日本に送り続けたのか？それとも朝鮮の貧困に眼をつぶり、日本から在日朝鮮人を追放するため、悪意に満ちた意図のデマをかいたのか？

多くの日本の人たちはそうでなく、ただ社会主義祖国北朝鮮に憧れる在日朝鮮人を善意から送り出したのだろう。一部、「どんなに北朝鮮が千里の駒の勢いで急速に復興していても、今の日本より豊かなはずはない。北朝鮮に行っても、また苦勞するだけだ。」と、忠告してくれる親切な日本人もいた。だが、私を含め当時の帰国の嵐は、そんな助言に耳を貸すような、状況でも心

境でもなかった。吉永小百合主演の映画「キューポラのある街」には、帰国する中学生が「俺たち、日本でこれだけ貧乏なのだから、世界中どこへ行ってもこれ以上貧乏な所はない。」と断言して、喜々として北朝鮮に帰国する様子が描かれている。

「今までこんなに苦勞してきて、やっと北朝鮮へ幸福になりに行くのに、今さらこれ以上邪魔されてたまるか」というのが、帰国者の本音だったと思う。少なくとも私はそうだった。もう北朝鮮に帰国して祖国建設に身を捧げることだけが、自分の将来を託す道だった。

帰国船は出たが

1959年12月14日熱狂的なテープの嵐の中、ソ連船のクリリオン、トポリスク号の二隻の第一次帰国船が、新潟港を出港した。

中でも第一次船で帰った人は、帰国者の中でも超エリートと、マスコミの注目を浴び、在日朝鮮人から羨望の的として見つめられた。帰国者たちは凱旋パレードのように平壤に入り、金日成首相に抱きかかえられ熱烈に歓迎された。

東京タワーを設計したような科学者、藤原歌劇団のテナー歌手金永吉(永田舷次郎)、日本で商売も成功し

30 上記『帰国船』p85～86

ていて、それなりに裕福だった人たちまでも、続々と帰国船に乗った。

祖国の建設に身を捧げようと。在日朝鮮人の誰もが乗り遅れまいと、新潟に殺到するような光景が、二年間くらい続く。

この冊子の資料欄にある新潟の帰国者臨時宿泊施設である日赤センターでの、帰国者の喜々とした顔を見て欲しい。栄養状態も、顔つきも、着ている服も、『地獄への奴隷船』に引っ張って行かれる人には、とても見えないだろう。

実はこの写真集は、在日の貧困層が帰国船に殺到した最初の頃の状況から少し

経ってからの作品である。

初めの頃は、帰国者の実に 50%もが被生活保護家庭の超貧困層が占めていたが、31)1963 年頃には 5%にも満たなかった。

だが、この人たちの笑顔も長くは続かなかった。北朝鮮は決して地上楽園でも、矛盾のないすべてが解決された天国でもなかった。祖国建設に貢献できると、喜々として渡って行った人たちを待っていたのは、また新しい差別と貧困だった。そして日本の親族にとっては人質を取られたことになった。北朝鮮は財産没収と日本からの大きな金づる、労働力を手中に収めた。いくら本人の意思により自発的に帰ったと

言え、結果的には『地獄への奴隷船』に、騙されて自ら乗ってしまったのだ。

第二次大戦後の世界の冷戦構造の中、東側から西側に命からがら逃げたケースは多々有った。しかし西側から東側に、しかも十万人近くもの大量な人が渡った例は、20世紀でも稀有どころか、このケース以外は皆無である。これは東側共産主義陣営と西側自由主義陣営間の、戦闘のない、血の流れない戦争、と表現するのが相応しいのかも知れない。この戦争自体は、北朝鮮側の圧勝で終わったと言えよう。それは東側社会主

31) 「34年(1959年)に帰還協定ができて、最初の二年間くらいで大多数の人間が帰

つたが、その当時における帰還者の生活保護を受ける率というのは非常に高かった。大体50% 以上のものが生活保護を適用されたと思う。最近はその統計がわからないが、荷物その他の状況から見ると、それほど多くない。

むしろどちらかという、裕福な階層のほうが帰つておるのではないかという印象を受ける。(補足)34年に入つたときには、48.5%くらいの人が、帰る者のうちの約半数が被保護者だった。それが38年(1963年)ごろになると、5%に減り、それ以降はわからないが、おそらく最近とってみれば1%もないのではないかと思う。」

1967年4月28日自由民主党広報委員

会(情報資料76号)『北朝鮮帰還問題について』p20、1995年7月10日新幹社発行『北朝鮮帰国事業関係資料集』p172。

義イデオロギーの勝利ではなく、日本での民族差別に終止符を打ち、貧困からの脱出、社会主義祖国への憧れとして、帰結した。

しかしこの戦争は、これでは終わったわけではない。それどころかこれから始まる帰国者の受難の歴史の、ほんのプロローグ(序幕)に過ぎなかった。

帰った人たちからは、「この国は自分の思っていた所とは違う」ということを伝える手紙が、検閲の下で日本に残っている友

人や親族に届く。祖国に帰ったはずなのに、日本に永く住んだせいで、生水が合わずに現地の風土病にかかるエピソードもあったほどだ。

一次船に乗った975名の内、約300名は平壤で歓迎大会に招待され、平壤近郊および西南地区に就職配置された。このような集団歓迎は二次船までであったが、三次船からは清津市から配置された地区に、小集団や個人別に輸送され、平壤には集団では入れなかった。

帰国申請をしていた私と母(日本人、韓国籍)にも、平壤以外の土地へ住む打診が来た。「北海道や東北の厳寒地ではない愛知県から帰るのだから、平壤が駄目

なら、それより南の沙里院ぐらいに住みたい。しかし何とか、やはり平壤に住めないか」と要望した。

そして当時から既に、農業主体の韓国に比べ、工業主体の北朝鮮ではあまり良質のお米が採れなかった。「主食はトウモロコシになるが、お前は耐えられるか」と母は私に尋ねた。満 10 歳だった私は、日本の甘い焼きトウモロコシを想像し、却って大喜びしたものだ。それが今収容所体験者の語る、鶏か鳩の餌のように固いトウモロコシ米だとは、夢にも思わなかった。

帰国者たちが当初から監視対象になったことは、鄭箕海(チョン・ギヘ)さんの手記『帰国船』からも明らかであるが、帰国者と

現地の人たちの中での摩擦もいろいろあったと思われる。言葉の問題、価値観の違い、そして何よりも持ち物の違い。日本での生活は貧しかったとはいえ、全財産をひっさげて帰ったのである。現地の人から冷たい目で見られ、「キボ」(帰胞)と呼ばれた。逆に帰国者たちも、現地の人たちの低い生活水準と不潔な環境を見て、「アパッチ、原住民」と呼んだりした。32

帰国事業の帰結と現在

だから、単に日本の差別から逃れ、幸せになりたくて「帰国」した、いや未知の土地に渡った在日朝鮮人を待っていた運命

は、余りにも過酷だったと言える。

帰国者への嫉妬は、出身成分による差別、スパイ容疑のでっち上げ、マグジャビ（やたら捕まえるという意味）、収容所送りへと結びついて行った。上記の金永吉、金天海、鄭雨沢氏らは、皆アムネスティー・インターナショナルが発表した勝湖里強制収容所の収容者名簿に載る。

1963 年帰国した総聯京都府商工会長姜泰休(カンテヒュ)氏一家は、持って帰った莫大な財産のせいで、平壤で立派なアパートに住み、スウェーデン製ボルボ車を取り回していた。しかし、ある日突然、姜泰休氏は失脚し、一家は咸鏡南道耀徳の強制収容所に入れられ、孫の姜哲煥(カンチョ

ルフワン)氏は9歳から19歳までをそこで過ごす。亡命して現在ソウルに暮らす彼の身長は175cm、体重も70kg位はありそうだが、収容所をでた19歳の時、身長は150cmに満たず体重は39kgしかなかったという。それだけで収容所の劣悪な栄養状態を説明して余りあるだろう。

1961年私たち母子は父と別れ、二人で北朝鮮への帰国を決意した。朝鮮語を覚えるために、4月から愛知県の豊橋朝鮮初級学校の5年に転校した。だが母が日本人の私と母の帰国は許されず、6月30日新潟から追い返された。10歳だった私は、「泳いでも渡って行きたい」と母の血を呪った。10mすら泳ぐ能力がなかったのに。で

も私は偶然、地獄への船に乗らずに済んだ。

私が 16 歳になった頃、帰国者の数が底をついた。民族学校の担任教師は、高校 2 年のクラスメート全員に「単独帰国」を勧めた。私は「私が申請すれば、一人前の社会人と国が認めて単独帰国するのだから、実の母親を連れて行って何が悪い」と一計を案じた。だが北朝鮮側の回答は冷酷で、「単独帰国は認めるが、飽くまで母は血統的に日本人だから駄目だ」というものだった。当時はもう、北朝鮮は日本人妻の帰国を固く禁じていたのだ。早く帰国した日本人妻たちが、三年以内に里帰りさせようと、直訴やデモを起こした事件があった

らしい。あの国では直訴やデモなど、想像もできないことな 32)1961年6月9日62次船で愛知県岡崎市から単独帰国し、1962年11月15日38度線を越えて亡命した金幸一(キムヘソイル)氏が、1995年4月非公式に日本を訪問した時、著者が直接聞いた時の逸話。

のに。当然日本人妻は当局からきびしく監視されることになった。日本でも日本人妻を持つ総聯幹部の多くは、1960年代後半組織の命令で強制離婚させられたりした。

母は「お前一人北朝鮮に渡って幸せになれ！」と、私に単独帰国を勧めたが、人間

としてそんな道を選べる筈はなかった。ただそれほどまで、その頃の日本では、人々が「北朝鮮にさえ帰れば何とかなる」と心の底から信じていたのだ。日本で朝鮮人として民族差別を受けていて、なおかつ祖国から異民族として切り捨てられた私のショックは大きかった。

いま北朝鮮の日本人妻の問題がクローズアップされている。朝鮮人の夫と共に北朝鮮に渡った日本人妻(日本人夫)は、いまだ一人の母国(日本)訪問も許されていない。

日本人妻たちはもう高齢で、残念だがその大半は亡くなってしまった。しかもその前に、日本人妻は日本人の親、親族から

「朝鮮人と結婚した娘など、勘当だ」と家を追い出されて、北朝鮮にも日本にも身寄りのない、可哀相な人が多い。上記姜哲煥氏が耀徳の収容所で 10 年の間に会った 12 人の日本人妻は、出所した二人以外は全員収容所の中で亡くなったそうだ。1995 年 3 月韓国に亡命した帰国者、呉寿龍、金初美夫妻も、新義州に住む 50 人近い日本人妻の窮状を訴えている。生存する日本人妻は全員無条件で、早期に里帰りが許されなければならない。

日本人妻の里帰りの問題に関連して、里帰りと自由往来を飛び越えて、血統的に日本人だから、日本に帰してやりたいと帰国を要求する人たちがいたら、一寸考えて欲

しい。母親を捨てて帰れと言われたのを拒否して日本にとどまった私の立場から見れば、日本人妻だけを日本に帰すというのは、また新たな民族差別なのではないかと思う。永住帰国を考えるなら、家族全体の帰国を考えるべきである。

日本人妻のことを取り上げている政治家、マスコミの人たちが、単に民族的、排他的感情から「日本人妻」を、とりあげているのでないことを切に祈る。

もう一つ注意をうながしたい。もう30数年の時は経っているが、当時帰国に大賛成した多くの日本人が、帰国者の日本との自由往来の要求には、まるっきりそっぽを向いていることはないだろうか。もし、そうだ

とすれば、帰国には賛成だが自由往来に反対で、帰国事業が朝鮮人追放だったことを、結果的に証明してしまう。

地獄への片道切符を手に帰国した同級生やその親族たちは、あの地で死を迎えつつある。「帰国事業は人道上の仕事であり、在日朝鮮人を助けてあげた立派な事業で、日本人には何の責任もない」という意見もある。人道主義の旗の下、「居住地選択の自由」と推し進められたのが北朝鮮帰国事業だった。でも「居住地選択の自由」なら、帰国者も日本人妻もいつでも日本に帰ってきて住めるはずだ。それこそ 38 度線を挟んで南北に離れている一千万離散家族も、皆「居住地選択の自由」がある

はずだし、そうなれば統一だし、平和だし、
それこそ最も望ましいものである。北朝鮮
への帰国だけが「居住地選択の自由」なら
ば、それこそ政治的で恣意的なものになっ
てしまう。居住地選択の自由をいま一度想
起しよう。

特に日赤と国際赤十字は、人道問題とし
て始めたこの事業に責任がある。かなり遅
くなってしまったが、今からでも急いでアフ
ターケアに真剣に乗り出すべきだ。

また、多くの同級生や親族を北に送った
在日朝鮮・韓国人の立場からも、早急に帰
国者の人権救済に取り組むべきだ。上記
姜哲煥氏が 1995 年 7 月来日時、私は「私
自身も『金日成將軍の歌』を吹奏し、多くの

帰国者を北朝鮮に送り込んだ加害者だった面がある」と謝罪した。だが彼の答えは何と、「私の祖父母こそ、『人間生き地獄』へ多くの人を引き連れて行った張本人だった」という、思わず絶句すべきものだった。

帰国事業に歴史の審判が下されようとしている今、数少ない帰国者の生命を救い、時が過ぎて帰国者が全員亡くなってしまう前に、その歴史的な生き証言を直接是非聞きたい。

祖国の統一を前に、民族の歴史の前に、主体的でありたいと願うものである。

かって主体的に帰国しようとした一人として、9万3千人もの人が帰った帰国事業を可能にした諸契機を、以上のように考えて

みた。論争の一助となれば幸いである。

証言

収容所で会った帰国者と日本人妻

安 赫(アン ヒョク)

(編集者注)安赫氏は姜哲煥氏との共著『北朝鮮脱出(上・下)』(文春文庫)で知られている亡命青年である。彼は単行本を二冊ソウルで出しているが、『耀徳リスト』はその一冊である。ここに紹介する一文は本書第 13 章「人、人びと」全文である。彼が収容所で会った日本からの帰国者や日本人妻についての大変貴重な証言であ

る。

一読だけでなく、繰り返し読んでほしい。眼光紙背に徹するほど。とくに日本人妻について指摘されている「日本の女は弱い」という収容所内の現地の人々の評は、日本人全体に当てはまるのではないかと思う。1800 人といわれる日本人妻は果たして今何人生きているのか。3 年後の里帰りという約束を信じて渡った彼女たち。それが守られていれば「日本の女」も 50 代で死去することはまぬがれたことと思う。

30 数年も約束を反故(ほご)にしてきた北朝鮮当局やそれに抗議すらしない朝鮮総連中央に「人道主義的」云々(1997 年 7 月 16 日アジア太平洋平和委員会の「日本

人妻帰国問題に関する談話」)を語る資格は全くない。日本人ゆえの差別、朝鮮語ができないゆえの差別、女性ゆえの差別、日本人妻は三重の苦しみを背負わされて生きた。

「死ぬよりもつらい生というものがあるんだよ」と語った日本人妻。安赫氏の『耀徳リスト』の巻末には、記憶をふりしぼって記した収容所の人々のリスト(名簿)が百余名掲載されている。固有名詞を記し、その人に代わって北朝鮮の野獣のような当局を告発し続ける安赫氏に我々も続けたい。

なお安赫氏は今春ソウルの漢陽大学を卒業し、現在同大学院に在籍中。

* 安赫著『耀徳リスト』(ソウル、

天池メディア)より pp208 ~ 216

安 赫氏の証言

耀徳(ヨドク)収容所には 74 年の初めに百世帯、六百余名が初めて収容されて以来、79 年まで毎年百 ~ 二百世帯づつが増やされてきた。

現在帰国同胞は、一家で収容されている家族世帯八百余の五千人と、「犯罪者」張本人三百余名で、都合五千三百余名が収容されていると把握される。80 年代以後は帰国同胞収容者が減り、新たに収容される人はほとんどなく、審査結果によって出所を待つ人のみが残っている実情である。

収容所に入れられた帰国同胞は、日本で朝鮮総連の事業をされていて帰国した人、北朝鮮の虚偽宣伝に騙されて帰国した人、体制不満を表現する可能性があったり、実際に不満を表示した人たちとその家族で、ほとんどが理由も分からないまま耀徳収容所の旧邑(クウプ)地区十班の、三箇所の村に分けられ集団収容されている。

村と村は 200m 間隔で離れていて、昼間でも相互の訪問は規制され、通行証なしでは移動は不可能で、夜間十時から朝五時半までは通行が禁止されている。

夜間には保安員と作業現場監督三、四名が、毎日巡察して家宅点検を実施し、人

数が足りない場合は村の鐘を打って非常
をかけ、捜査を実施する。

特に夜間十時以降に外出して巡察に摘
発されれば、一ヵ月間強制労働に処せら
れ、三回以上摘発された場合は収容所内
の拘留場に入れられてしまう。

収容所生活の中で、李世奉(リ・セボン)
に出会ったことは悲しい思い出である。

帰国同胞の世奉は日本にいた時、医学
を勉強して脳の専門医になるのか夢だっ
たという。 彼の上の兄も日本の東京大学
に通う、秀才の家柄で世奉もやはり秀で
ていた。

彼は帰国者の村に暮らしていたが、人民
学校(小学校)に通う頃から、収容所内で

暮らす子供と違い、血行も良く体格もがっしりしていた。しかし仕事がうまく出来ない上に、朝鮮語が全然できなかつたため、人々から仲間外れにされた。

世奉の母は夫が一人で帰国した後、三人の子供を育て、学ばせ、生活した女傑であった。そして1982年北朝鮮から世奉の家族に、父親に会わせてやると招請があった。世奉の母李春和(リ・チュンファ 49)は長男を除いた二人の子供、世奉と美和をつれて訪問の為に北朝鮮に来たのだった。

世奉の長兄李徹海(リ・チョルヘ)は、まだ日本で暮らしているという。

この世奉の家族は平壤に着いて初めて

北朝鮮当局に騙されたという事実を知ったが、時すでに遅かった。その当時世奉の父は、すでにどこかの収容所に送られた後だった。当局では祖国訪問団の一員として来た、世奉の残りの家族のスパイ容疑をでっち上げ、ここ耀徳収容所に入れてしまった。

“夫に会わせるといったのに、こんな事があるのか？” 李春和は初め何度も抗議して見たり、苛立つ心境を抑えられず地団駄踏んだりしたが、やがて全て無駄だと悟った。かえって彼女たちは朝鮮語も満足に出来ないので、他人からもっと大きな苦痛を受け、笑い者になったりした。

ある日のこと、李春和おばさんが警備当

番に立つ畑の唐がらしの苗木が、半分以上も使い物にならなくなったことがあった。当然思想闘争に立たされた。

「このばばあ、本当のことを言え」地区の組長が李春和おばさんを立たせた。

「唐がらしの苗木を、誰が駄目にしたのか言えないのか？苗木を皆駄目にして...」

物凄い勢いの組長の表情におびえた李春和おばさんは、ただでさえ朝鮮語を上手くしゃべれないのに、驚いて言葉を一つも続けられなかった。

「セ...ンセイサマ！」

おばさんは異常な抑揚で地区組長を呼んだ。だが余りに発音や抑揚が奇怪しくて、何のことか良く理解できなかった。

「それでも・・・唐がらしの種は・・・皆全滅はしていません。」たどたどしく吐いたその言葉が、余りにおかしくて人々は笑いをこらえるのが大変だった。組長はもうそれ以上は怒れず「このばばあ、口ぐらいちゃんときけ」と言って終わった。

このおばさんは、若くて力強い人たちが伐採組に動員されると聞き、「尋常でなく素直な人たち」と言ったりしたので、もう一度笑い者になった。

彼女たちは言葉は下手だったが、人情が深く礼儀も正しい人たちで、他人から憎みを買うようなことはなかった。賢哲(ヒョン Chol)が腕に怪我をした時も、世奉の妹の美和(ミファ)がトウモロコシの餅を持っ

て見舞ったことがあった。

収容所内ではそんな事は、まったくあり得ない事だった。

世奉は私が収容所に入るずっと前から耀徳で生活していた上に、帰国同胞の村で暮らしていたので哲煥とも親しかったようだ。彼は収容所で長く生活した後にも、‘ここにいるのが夢’のようだと、哲煥にしよつちゅう話したという。

そんな彼の美男子な顔と頑丈な体は、げっそり痩せ細ってしまった。

ある日彼は、日本語の辞典を見ているのを告げ口されてしまう。世奉は全区域の人が集まった場所で舞台に上げられ、政治部長に叱られ、大衆闘争による批判を

受けた後、拘留場に入れられた。

拘留場から帰った世奉はますます衰弱し、病んだ体にムチ打って作業所で働かなければならなかった。

そんなある日、野菜畑での作業中ついに彼は「腰が痛い」と言ってそのまま座り込み、二度と立てなくなった。いくら頑張ってもどういう訳か、どうしても立ち上がれなかったのだ。そのうちだんだん視力も落ち、前を見ることもできなくなった。

「私は日本語の漢字の本を見ていただけで、他の内容は見たこともない。あまりにひどい。何の罪もない人間をこんな病人にってしまうなんて、生きていて何になるのか。死ぬ日だけ待ち続けて生きるより、一

瞬でも早く楽に死んだ方が増した。」

世奉が全く働けなくなると、彼の母親と妹美和が薪を拾って、やっとのことで暮らしていた。

世奉はその凄惨な生活に耐えきれず、自らの首を締めた。気を失い首を括っている彼を、美和と母親が発見して、助けを求めた。

私たちが駆けつけて助けると、世奉は「このまま死なせてくれ」と哀願し、涙をぼろぼろ流した。

当初収容所に来た時、その風貌が余りにも美しく立派で、家族世帯のみならず独身者にも一目置かれていた彼が、二年足らずの生活の中で完全に廃人となってしま

ったのである。

任徳源(イム トク ウォン)の家族も帰国同胞だが、哲煥の家族よりも半年遅く収容所に来た。

初め徳源は母親がいっしょだったので、母親のいない子供たちは彼をととても羨ましがった。

しかし徳源の母はいくらも経たずに、ここでの生活に耐えきれず死んでしまった。

人々は、日本人の女は朝鮮人の女よりあまりにも弱すぎると、ひそひそ話をした。彼女たちは豊かに暮らして来た人だったので、食べ物のために苦勞を多くした。

趙成基(チョソンギ)という人も、日本から来た人だった。彼の妻もやはり日本人だっ

た。ある冬の日、夫の趙成基が死んでいく
らも経たずに、彼の日本人妻もほとんど死
境に至ってしまった。

朴順玉(パクスンオク)の母も日本人だっ
た。彼女の父親は歴史学者だったが、体
制批判をしたために収容所に送られて来
た。夫婦仲が良く、夫は日本人妻を助けよ
うと一生懸命努力したが遂に妻を救えな
かった。

その夫の名前は朴基泳(パク キョン)だ
ったが、ネズミを取って来て食べさせ、カエ
ル、ヘビ、ミミズ
まで取って食べさせたが、妻は骨と皮だけ
になった体で恨み多い一生を終えたので
ある。人々はその日本人妻にとても同情し

て涙まで流した。

鄭松雅(チョンソンア)の母もやはり日本人妻だった。父親は映画俳優だったが、帰国後スパイの汚名を着せられ、いつの間にか居所が知れなくなった後、家族全員が耀徳に送られて来た。

松雅が長女で、その下に美雅(ミア)と長男翰佑(ハンウ)と次男慶佑(キョンウ)がいた。その母親は、日本人妻の中で非常に珍しく生き残った、二人の内の一人だった。

ある日本の女は、入ってから一年もしないで利疾(一種の慢性下痢)にかかり死んだ。朝鮮人は下痢にかかっても余り死なないのに、日本人は下痢にかかるとすぐに

死んでしまった。また日本人は山の野草を食べるのを知らなかったし、食料を少しずつちって残して食べることも知らなかった。

帰国者の村の日本人妻は肉体労働や飢えよりも、外部との連絡の遮断がつらかったようだ。家族、友人とある日突然消息が途絶え、生死も分からないのは、彼女たちにはとても耐えがたい事だったろう。

学校側から見れば、帰国者の家の子供は比較的聞き分けの良い方だ。しかし先生たちは言葉の端々で“半日本人の餓鬼”などと平気で悪口を言っていた。

特に母親が日本人の場合、子供たちは怯えてまともに口をきくことも出来なかつ

た。もし下手な朝鮮語を使えば、先生でも大人でも馬鹿にして、半日本人のくせに革命精神が足りないとか言われるので、口をにこりともさせられなかった。

帰国者の村の人たちは陰で朝鮮総連の悪口を言い、騙されて帰国船に乗った自らの愚かさを後悔したりした。

1976 年から 79 年の間に帰国同胞の内、日本人妻十四名が家族と共に耀徳に収容された。しかしそのほとんどが収容所内の生活に適応できず、十二名は収容された後二、三年以内に肺病などで病死または餓死し、二名だけが出所したという。

1978 年に収容され 88 年 2 月に出所した李順花(リ・スンファ 58 歳、日本名?)は

63 年頃夫と共に北朝鮮に来て、78 年頃夫がスパイ容疑で行方不明になり、長男鄭燦友(チョンチャヌウ)(24 歳、2・8 映画撮影所労働者 = 2・8 は朝鮮人民軍創建記念日)と共に耀徳収容所に入れられたが、87 年に日本に居住している彼女の父親が娘の名義で 40 億円の遺産を残して死亡してしまうと、朝鮮総連がこれを着服してしまった。

90 年 2 月李順花の在日の親戚が遺産に対する返還請求訴訟を起こすと、朝鮮総連は使って残った 30 余億円を‘祖国統一事業資金’という名目で北朝鮮に任意献金してしまった。このことで李順花は心臓病が悪化して、現在は亡き父の墓参りをす

るのが夢だと、南浦に居住していると聞いた。

74年に收容され79年頃出所した洪博仙(ホンバクソン 68歳)は74年咸鏡南道端川市剣徳鉾山で働いていた時、現地指導に来た金日成に、同僚日本人妻十余名と糾合して「私たちは、ここの生活に合わない。日本に帰して下さい。」と抗議した理由で、

単身で收容された。その事件で帰国同胞たちに対する制裁と監視が強化され、行方不明になる事例が頻繁になった。

洪博仙は79年に出所し、現在息子、娘三人と一緒に平壤に住み、息子は平壤市芸術団作曲家として活動している。

また北朝鮮では、日本との修交問題が提起されてから日本人妻に対して関心を持つようになり、91年からは全国的に登録事業を推進して来ている。彼女たちには病院を使う優先権を与え、生活必需品も党の郡幹部クラスの配給をし、党幹部が日本人妻の家を訪問し、生活問題を解決して上げると言って布団入れやタンスを持って来てくれるとか、突然待遇が良くなった。特に最近は日本人妻の日本訪問や、日本の親族の北朝鮮訪問に備えて、生活が潤沢で日本帰還を拒否する可能性のない日本人妻十一名を選抜、管理している。

資料 北朝鮮帰国事業と私の責任*

金 昭平(キム ソピョン)

(元民族学校朝鮮中級学校教師)

昨年秋「北朝鮮帰国者の生命と人権を守る会」の連続講座を聞きに行った折のことである。金英達先生の講演のあとの質疑応答の中で、曹幸さんという方から「自分の兄を北朝鮮に帰国するように奨めた当時の総連の人たちは、その大部分が自分たちは帰国せず日本で暮らしている。この会場にも当時帰国事業を奨めた人たちがいるが、この人たちは帰国者の今の不幸

な状態について、一体、自分たちの責任をどのように考えているのか」という、質問というよりはむしろ非難に近い発言があった。

曹幸さんの兄、浩平さんは東北大学大学院を出たあと、生物学者として日本人妻を伴って北朝鮮に帰国したが、三人の子供ともども一家五人が北朝鮮当局によって銃殺されたという。私は先日、731 部隊展で聞いた元日本軍憲兵曹長三尾豊氏の話思い出した。三尾氏は中国大連で中国人李忠善他 2 名を逮捕し、人体実験用としてハルピン近郊の 731 部隊に護送したが、昨年暮、日本政府を告訴するために来日した、故李忠善氏の妻敬蘭芝さん

に裁判で証人として協力するために面会した折、敬蘭芝さんが「許すことはできる。然し、忘れることは出来ない」と言ったというのである。肉親を殺された遺族の恨みが如何に深いものであるかを思い知らされた。曹幸さんにしても、兄を死地に追い込んでおいて、自分は日本に居座ったまま全然

* 『僚友』1996年4月号

反省もせず、殺されるようなことをする奴が悪いとうそぶいている総連の人間に対して、その怒りが如何に大きいかは充分に分かるような気がする。私自身、当時、総連の末端の一員として、些少なから帰国事業に参加した者の一人として、曹幸さん

の非難には心底胸が痛んだ。帰国事業当時、総連の某県本部委員長だった人が、しみじみと、私をぶっ殺してやりたいと怨んでいる帰国同胞がいっぱいいる、と嘆いていた言葉が帰国事業のすべてを語っている。この元委員長先生もご自分の長男を帰国させている。決して騙す積りで帰国事業の先頭に立ったわけではないことは分る。然し結果として、帰国した人と、その在日の家族の大部分が帰国したことを後悔しているという現実に対して、私たちはそれなりの責任を感じないわけにはいかない。

帰国事業が始まった 1959 年頃、私は兵

庫県姫路市にある西幡朝鮮中級学校の教師をしていた。そしてこの帰国事業を大歓迎した一人である。

当時、日本はようやく白黒テレビに冷蔵庫、そして電気洗濯機が三種の神器として珍重されはじめ、朝鮮戦争の特需のおかげで工場や建設現場では人手不足が話題になり始めていた。然し間違っても私たち朝鮮人学校の卒業生には求人照会などはなく、卒業しても日鉄広畑工場などの、下請のその下請の日雇い人夫になるか、あるいは住込みで神戸あたりの同胞のゴム工場に行くのがせいぜいであった。まともな企業の社員などは夢のまた夢であった。或る生徒は中学一年生

の時から3年間新聞配達をしていたが、その真面目な働きぶりに感心した配達先のある会社の重役が、自分の会社に入れようと随分骨を折ってくれたが、国籍のために入社できなかった。

どんなに真面目で才能があっても、朝鮮人は気の向かない隙間の仕事で一生を送るしかなかったのである。当時、姫路駅前近郊の盛り場などでうごめくチンピラの中には、私たちの学校の卒業生が多かった。また、山陽デパートの裏の高架下に立ち並ぶ屋台店で矯声をあげている女の中にも、私たちの学校の卒業生が多かった。

在学中にすでに非行に走る者もいて、

私が学校で教養主任をしていたときには、しゅっちゅう姫路警察署に呼び出されたものである。長欠している生徒もいた。ある日、網干の朝鮮人集団地域の中で、その春、卒業したばかりの徐健司という少年にばったり出会ったことがある。彼は手を包帯でつっていた。カチヤをしていて鉄骨から落ちてケガをしたのだが、労災保険もないということで顔色が冴えなかった。徐健司君は私の担任ではなかったが、中学三年の時にはトルストイの短編をロシア語で読んでいた。若しまでもな学業さえ続けられれば東大・京大も夢ではないと思われた程の秀才で、本人も強く進学を希望していたのであるが、家が貧しくて進学できな

かった。

当時、兵庫県では朝鮮高級学校は神戸市垂水にあった。ちなみに私のいた西幡朝鮮中級学校の校区内の初級学校は、姫路、網干、相生、高砂、飾磨の五校と瀬戸内海の家島にある分校であった。家島を除いて、この広い地域から生徒たちは電車やバスに乗って通学するのであったが、朝鮮人学校の生徒は安い通学定期券を買えず、サラリーマンと同じ高い通勤定期で通学していた。日本政府は裕福な日本人の高校、大学生には安い通学定期を売り、貧乏な朝鮮人の中学生には高い通勤定期を強制している。

こういう差別の中で私たちは生活してい

るのである。通勤定期で神戸の高校まで通うのは大変だし、日本の高校には教科内容が違っていて入学が難しかったので、進学できる卒業生が少なかった。私たち教師は悩んだ揚句、西幡に高等部を併設しようと運動してみたこともあったが、一県一高校の原則もあり、且つもろもろの事情もあって、結局この計画は実現しなかった。出口の見えない行き詰まりの中で悶々としている時に、北朝鮮政府が在日同胞の帰国を歓迎するという報せを聞いたのである。私たちの喜びは大きかった。朝鮮民主主義人民共和国がますます輝いてみえた。

私は総連の路線転換のあと、1956年に

教員になったのであるが、当時は月給とは名ばかりで、まともに貰ったことがなかった。その頃、総連姫路支部は姫路駅前の一等地に事務所と店舗を構え、店舗を同胞のパチンコ屋に貸していて、その家賃の上がりから姫路朝鮮初級学校と西幡朝鮮中級学校に毎月扶助金を出してくれていたもので、他の学校に比べると財政は楽であった筈だが、それでも経費の大部分は生徒の月謝と父兄の寄付に頼っており、台所は火の車であった。我々教職員が教育会長のところに金をもらいに行くと、必ず決まって生徒に月謝を催促しろとハッパをかけられるので、それが嫌でついつい我慢してしまうことが多かった。

そういうときに朝鮮民主主義人民共和国から教育援助費が送られてくるようになったのである。正に天の恵みのように思われた。それ以降、薄給であったが、毎月、決まった日に月給がもらえるようになったのである。初めて月給をまとめてもらったとき、私は生まれて初めて、当時、千葉県に住んでいた父に若干の金を送った。精一杯の親孝行のつもりであった。然し残念ながらこの親孝行は長続きしなかった。絶対量が不足していたのである。後日、義母がこの金をそっくり貯金しておいて、私の結婚の時に、その通帳をくれたのだが、余りにその金額が少なかったので、恥ずかし

くて私はそれを家内に見せられなかった。
とにかく共和国の教育援助費によって学
校も助かり、私の生活も一息ついたのであ
る。

そして私の共和国に対する信頼も一段
と高まっていたのである。共和国の教育援
助金が、北朝鮮の人々の毎日の米一匙献
納運動によるものであることを知ったの
は、暫くあとになってからである。また北朝
鮮当局は金も出したが口も出して、それ以
降、朝鮮人学校は在日朝鮮人の民族学校
から、朝鮮民主主義人民共和国の国民学
校に変貌した。

帰国事業が始まった頃、北朝鮮はその
前年の 1958 年までに植民地経済から過

渡期段階を経て、いよいよ社会主義社会に移行すべく、第一次7ケ年計画を打ち上げていた。7ケ年計画が完遂されれば、すべての国民は瓦屋根の家に住み、絹の服を着て白米に肉のスープで食事ができるような地上楽園が出現し、遠からず日本を追い抜くというはなばなしいものであった。そして、“千里馬”が国民の合言葉になっていった。ソ連ではアメリカに先駆けて人工衛星スプートニクを打ち上げ、毛沢東は東風が西風を圧倒すると豪語していた。社会主義祖国の将来はバラ色に輝いて見えた。それにひきかえ、李承晩治下の韓国では、ユンボギの日記がベストセラーになり、子供たちの悲惨さが人々の涙をさそっ

ていた。

私は確信を持って父兄や生徒に北朝鮮への帰国を奨めて歩いた。全国で帰国運動が盛り上がり、私の教え子も単独で、あるいは家族と一緒にたくさん帰国した。単独で帰国した徐健司君からは学校の寄宿舎に落ち着いたこと、部屋の友達に日本から持っていった女優山本富士子のプロマイドを見せたら、日本人はみんな悪い奴らなのに、こんな美人もいるのかと口惜しがっていたと明るい便りが届いたりして私たちを喜ばせてくれた。

上郡町から帰国した金栄九と郭昌晩は私の級では一、二を争う優秀な生徒であった。一年生のとき、金栄九には“赤いカバ

ン”という作文がある。中学生になったのに家ではカバンが買えず、父は姉が使っていた赤いカバンを使えといった。自分は女のカバンは嫌だというと、母が見かねて新しいカバンを買ってやろうと言ってくれた。いつも船坂の山道をリヤカーを引いて苦勞している母を思うと可哀想なので、自分は赤いカバンで我慢することにした。然し、やはり恥ずかしいのでカバンを風呂敷に包んで通学していたら、母が街でズックの下げカバンを買ってくれた、といった内容であった。その金栄九が、ある日、休み時間に校庭で鉄棒から落ちて腕の骨を折った。私が自転車の荷台にのせて接骨医に急ぐ途中栄九は「先生、金がかかるんで

しょう」と心配そうに聞いた。学校で起きた事故だから金は学校で払うという、栄九ははじめて安心した。赤穂郡上郡町から神戸市垂水の高校まで通うのは容易ではない。栄九の進学のために私は何度も上郡に足を運んだ。郭昌晩は高校に一番の成績で入学した。その後、間もなく上郡では朝鮮人部落がそっくり集団で帰国した。高校生であった郭昌晩も金栄九も一緒に帰国した。

帰国運動が始まると我々教員も全員、帰国申請書を書くことになった。日本赤十字社に働きかけるには帰国希望者が多い程良いというのであった。日本生まれの私には親、兄弟はみんな日本に居り、自分一

人北朝鮮に行くことに若干のためらいはあったが、共和国は益々発展するし、韓国政権は風前の灯であったので、南北統一は目前のように思われた。祖国が統一されれば日本との国交も正

常化されて、親・兄弟との往来も容易になるはずだと確信していたので、場合によっては北朝鮮に行こうと決心していた。だから私の妹夫婦が帰国すると言い出したときも、猛烈に反対する親・兄弟を私は説得する側に廻ったのである。

私は今でも忘れられない。埼玉県蕨市に居た妹一家の帰国列車を、東北線大宮駅で見送ったあと、親友張宇根君の車で父を千葉の家に送っていく途中、父は車を止

めて何度も道端で吐いた。帰国した末の妹が 10 歳の時に母が亡くなり、父は殆ど男手ひとつで妹を育てた。その娘の北朝鮮行きが今生の親子の別れになることを父は確く予感していたに違いない。船酔いなどしたことがない父が何度も何度も吐いたのである。そして再び娘に会うこともなく 15 年後に父は死んだ。それ程までに親・兄弟を悲しませて帰国した妹の亭主は、夢に見ていた映画の仕事とは関係のないトラクター工場の片隅で年をとって、今では脳卒中で半身不随である。帰国直後から妹夫婦の悲鳴の手紙がくるたびに私は親・兄弟から責められる立場になってしまった。いや肉親からだけで

はなく、北朝鮮に帰国した多くの人々とその家族から責められ怨まれるべき立場になってしまったのである。とくに責められなければならないのは、私たちは帰国に消極的だった人々まで尻を叩いて帰国させてしまったことである。

帰国事業が始まると総連は大キャンペーンを繰り広げた。日本全国で帰国隊列強化運動が組織され、地域ごとに月間目標数が設定された。その目標は月々膨れ上がって、上部からは毎月のように帰国隊列を50%増加せよといった指示がとんできた。私たちは目標を達成するために、地上楽園の幻想をふりまいて帰国後の幸福を保証し、ためらう人の尻をたたきたたき、

人々を共和国に送る作業に汗をかいた。

ある帰国説明会の席で、共和国ではまだ石けんやちり紙が足りないらしいと心配する同胞の質問に対して「現在、アジアで飛行機や機関車を作れるのは日本とわが共和国に二ヶ国だけである。飛行機や機関車を作れる国が石けんやちり紙を作れないわけがない。皆さんは何の心配もせず、ただ手ぶらで帰ればよい。住宅や食べ物も着る物も、そして職場や学校もみんな首領様が準備して待っておられる」といった調子でアジリたてる総連幹部の横で、私は如何にもその通りだとばかり拍手を打っていたものだが、これはとんでもない詭弁である。人工衛星を打ち上げるロシアでは

炭鉱労働者が手を洗う石けんにもことかいているし、原爆を作っている中国の農村では、娘の身売り話がしばしば聞かれる。

本来、人道的立場から推進されるべき帰国事業が、北朝鮮と総連の政治的野心に歪められてしまったのである。下部にいた私たちは、数字合わせに夢中になって人間が見えなかったのである。そして今、怨嗟の声は満ちあふれている。今考えれば怨嗟の声は帰国運動開始直後からポツポツ私の耳にも入ってきていた。北朝鮮ではコークスで飯を炊くので不便であるとか、石川五エ門が多いとか、自由市場が繁盛しているとかの消息を聞く度に私は眉をひそめた。

帰国した教え子からは経済専門学校に編入されたが、内容は日本のソロバン学校だったとか、ある母子家庭で帰国した女生徒は、学費が無料だと聞いていたのに、実際にはいろいろ費用がかかって、日本にいたときより母が苦勞しているなどの不満の手紙がきていた。

ところが私はこれらの不満の意味の重大性に気がつかなかったのである。嚴重な言論統制をくぐって辛うじて漏れてくるこれらの不満は、実は北朝鮮という国が私たちが考えているような社会主義国ではないという告発の手紙だったのである。こんなことは、少し気をつければ事前に分かつ

た筈なのである。すでに 56 年にフルシチョフはスターリン型社会主義の恐怖を暴露していたし、北朝鮮での粛清事件は広く知られていた。長期独裁の弊害は人類共通の歴史的教訓である。

複数の世界観が当り前の日本からの帰国同胞が、独裁者の毒牙にひっかかり易いのは十分に予見できたことである。然し当時の私の頭の中は金日成の言葉が一杯で、車の中で吐いている父を見ても、娘を失った親の悲しみを理解できず、それぞれの人々のかけがえのない人生を左右する重大な帰国の問題を、まるで物見遊山に人を誘うぐらいの軽いノリではしゃぎまわっていたのである。勿論、私としても北

朝鮮への帰国に全然危惧の念がなかったわけではないが、日本で少しばかりの小遣い銭を儲けて、日本名でゴルフを楽しむ、そんな生活も結構かもしれないが、多少貧しくても、腹がへっても、自分の好きな道にうちこみながら、それで国家建設に貢献できる社会主義祖国での暮らしも悪くないと考えていた。なにが生き甲斐かは人それぞれの主観である。それに北朝鮮も経済が発展すれば、民主化もすすんで人々の暮らしもよくなる筈だと気楽に考えていて帰国した人々やその家族のかけがえのない人生を台無しにした誤ちについて、それ程深刻には考えていなかったのである。

6 年前、新潟から張明秀氏が上京してき

て、何人かの知人と一緒に池袋の喫茶店で落ち合った。そこで私は、のちに民涛 9 号に掲載された「帰国運動 30 周年、帰国運動とは何だったのか」という張明秀氏のワープロの原稿のコピーをもらい、その内容に腰が抜けるほど驚いたのである。多くの帰国同胞がマグジャビ(やたらに)に連行され、裁判もなしに消されているというのである。家族や知人にもその消息は分らないというのである。家族ぐるみで消されているケースもあるということに私は絶句した。あまりのことに、にわかには信じられず、韓国サイドのデマではないかと疑った。然し程なく、これらのことが事実であることが確認された。S 先生のご子息がただ

ラジオを持っていたということだけでスパイと断定され、もう 20 年も消息不明であるという事実を私は直接 S 先生から聞いた。これはとんでもないことである。腹がへった、仕事がきついといった類のこととは全然次元の違う問題である。黙っているわけにはいかないと思った。

張明秀氏の論文が発表され、私たちは 1990 年 4 月 22 日、駿河台の全電通労働会館で、北朝鮮帰国者問題対策協議会というものを結成した。被害者代表として金民柱先生と S 先生が報告された。そして結成大会で議長をつとめられた大田区の都善確先

生宅に事務所を置いて活動を始めた。

私たちの運動に対する総連の攻撃はさまざまだった。朝鮮新報はくりかえし私たちを白昼のばい菌ときめつけ、自宅や店に何度も脅迫の電話をよこした。ウサンクサイ人物が私の店に来たこともある。家族の迷惑は一かたではなかった。脅迫には私はその都度怒鳴り返してやったが、一度だけ、私の昔の教え子と称する者からの抗議の電話があったときは、さすがに私もこたえた。

私は結婚して 1961 年 4 月に東京都墨田区の第五朝鮮初中級学校に転任して中学一年生を担当した。電話の主は自分の名は告げず、教え子の一人だといって、帰国したクラス・メートの何人かの名前を挙げ、

「みんな幸せに暮らしている。そもそも貴方も彼等に帰国を奨めた一人ではないのか。近頃、南朝鮮の羽振りが少しよくなったからと言って、南朝鮮に色目を使って共和国の悪口を言って歩くのはとんでもない裏切りである。どうか、今すぐ目を覚まして欲しい」というようなことを泣きながら訴えるのであった。

私はその時、電話の主は鄭君かも知れないと思った。第五初中級学校にいた頃、私は葛飾区金町のアパートに住んでいた。鄭君の家も金町で、彼は朝、晩、朝日新聞の配達をされていて余分があるといって毎日無料で私のところに新聞を入れてくれていた。薄給のわが家には大変有り難い

ことで、家内はときどき菓子などをお礼にあげていた。彼は母子家庭でたいへんな弟思いであった。

当時、東京では緑のオバサンが横断歩道で、小学生の登下校を誘導していたのであるが、同じ小学校でも朝鮮人学校には緑のオバサンはきてくれなかった。それで私たちの学校では、中級部高学年と教員が当番制で道路に立った。私は当番のとき、いつも小学生の弟の手を引いて京成荒川駅から降りてくる鄭君をみて、優しいお兄ちゃんだなと感心していた。泣いて旧師を諫める心の優しい青年として先づ彼が思い浮かんだのである。然し、風の便りで、鄭君は北朝鮮に帰国したと聞いたよう

な気もしており定かではなかったが、敢えてそれをせんさくする気もなかった。電話の主は、まぎれもなく私の教え子の一人であり、なによりもそのことが私には辛かった。北朝鮮の強制収容所を非難する私と、そんなものは南朝鮮のデマであると主張する電話の主とでは話が全然噛み合わなかった。彼は私とは哲学が違う金日成教の教徒であった。そして彼を金日成教徒にした責任の一端は私にもあるのである。教員時代、私も金日成教徒の一員として、教祖金日成の有難さを吹き込んでいたのであるから。

いうまでもないことだが、帰国した人はみ

んな貧しく困まっていた人ばかりではない。その点で帰国事業を一種の移民政策であったとみる金英達先生の見解には異議がある。

西幡中級学校で私のクラスだった李陽子の家は姫路駅前で大きな居酒屋をやっていて裕福だった。学校にも月々、多額の援助をしてくれていたが、帰国するときにトラック一台に山盛りの品物を持参して当時大きな話題になった。また東京の第五中級学校で私のクラスだった李秀基の父親は、解放直後、富士見町の学友書房の土地・建物を朝連に寄付した人で、洋食器のメッキ工場を経営していて裕福だったが、技術と設備をもって帰国した。因みに、秀基の

母親は日本人であった。私の妹の亭主も映画の仕事をするんだと張り切って帰国したのである。とにかく、金持ちも、貧乏人も、年寄りも若者も社会主義祖国を信じて帰国した愛国者である。そしてその大部分が、こと志と違って不遇にあえぎ、トウモロコシの粥にも事欠いている。これはこれで問題であるが、それよりもなによりも祖国を信じて帰国した同胞を、さしたる根拠もなしにスパイ、反逆者と決めつけて収容所にたたき込み、虫けらのように殺すなどとはとんでもないことである。

昨年(1995年)4月29日、ロンドンのアムネスティ・インターナショナル本部が北朝鮮当局(朝鮮人権問題研究所)から直接聞い

た話によると、曹浩平さんは、スパイ罪で懲役 20 年の刑を受け、教化所に入れられた。そして服役中に脱走し、守備兵を殺してボートを奪い、妻と三人の幼い子供を含む家族五人で国外脱出しようとした。軍は脱走犯曹浩平さんを確認したうえで、幼い子供三人を含む家族五人全員をその場で射殺した。遺体はない、というものであった。

日朝協会理事の歴史学者・尾河直太郎先生は、曹浩平さん一家「銃殺」事件真相究明運動の呼びかけ人の一人になった動機を「幼い子供たちまで平然と殺す北朝鮮当局に我慢がならないからである」と述べられた。

昨年暮、東京国際会議で、ノーベル平和賞受賞者エリー・ウィーゼルが語った。「子供たちが死んでいくとき、人々は怒らなければならない。気高い人々が思想ゆえに獄中にあるとき、怒らなければならない」と。

当然のことながら、被害者の怒りは加害者にぶつけられている。私もその加害者の一人なのだ。だから私には北朝鮮の蛮行に対して人並みに怒る資格などない。あるのは加害者としての責任である。

北朝鮮帰国事業の過ちの主たる責任は北朝鮮当局にあり、それに加担した朝鮮総連にある。金日成・韓徳銖を頂点としたヒエラルヒーのそれぞれの地位・役割によ

って人々の責任の大きさが違うことは勿論であるが、然し、たとえ末端の一兵卒にすぎなかったとはいえ、私にもそれなりの責任があることは明白である。被害者の立場からすれば、みんな同じ穴のむじなののである。当時、私は30歳の大人であった。15年戦争に於ける日本国民の戦争責任のように、国家権力によって強制されたものではない。自分の考えで総連に参加し、帰国事業に加担したのである。

自分でしたことについては自分で責任をとらなければならない。加害者としての己の責任の追求は、まず、何故自分が加害者になってしまったのかという問題を、自分の言葉で反省し、被害者に対して謝罪

することから始めなければならないと私は
思っている。

15 年戦争の悲劇の地、泰緬鉄道跡の
記念碑には「許そう、だが忘れまい」と書
かれている。だが、反省もしないものを許
す人はいない。

活動記録(1997 年 4 ~ 6 月)

北朝鮮帰国者の生命と人権を守る会
の活動

「守る会」の 4 月から 6 月までの主な活動
を記す。

一つは、飢餓報道に基づく食糧支援の

新たな動きに対し、改めて守る会の立場を表明すると共に(5月17日)、8月2日と3日京都の比叡山で開かれる「世界宗教者平和の祈りの集い」の総会や人権分科会で、北朝鮮の強制収容所の存在など一連の人権問題を取りあげてくれるよう、日本の宗教者たちに要請したこと。この要請と合わせて、5月30日と31日の両日北京で開かれた朝鮮半島の南北和解と北朝鮮の飢餓に対する緊急支援を話し合う「北朝鮮・韓国宗教者会議」に出席する日本代表団[世界宗教者平和会議(WCRP)日本委員会]に、5月27日北京会議宛の文書を用意して要請した。日本代表団は我々の要請を会議当日誠実に

履行してくれた。北の代表団は、わが国は人権問題で今まで文句を言われたことはない、それぞれの国で人権の基準があると言いつつも、守る会の要請書を受けとったという。

北の当局者に、各界で北の人権問題が憂慮されているという事実を知らせることが大切であり、これを果たしてくれた日本代表団に感謝する。

二つ目の活動は、5月17日横田めぐみさんのご両親を招き、拉致疑惑事件についてお話をきき、あわせて北の工作員の日本国内での活動や食糧支援の是非について、金民柱、萩原遼両共同代表の話をきく学習会を開催したことである。守る会は去

る 3 月の総会で日本人拉致問題にも取り組めるよう会則を是正したが、この学習会はその第一歩であった。70 数名の参加があり、関心の高さを示した。

三つ目の活動は、5 月 29 日に衆議院議員会館内で国会議員とマスコミ関係者を対象に、帰国者と日本人妻の家族の証言集会を開いたことである。証言者は 4 人であったが、とくに始めて証言に立った在日商工人の金正日さん、母が日本人妻の中筋敬

子さんに関心が集まり、秘書を含めて 14 名の国会議員とマスコミ関係者が多数出席した。なお事前に衆・参の国会議員 750 名全員の事務所にチラシを配布した。6 月

17 日には北朝鮮拉致疑惑日本人救援議員連盟に自民党について多数の議員が加盟している新進党五役(幹事長ほか)に要請する機会をえた。

今期ある意味で最も特筆に値いする活動は、6月3日に本誌2号で紹介した「ラーゲリ註解事典」の著者ジャック・ロッシさんのお話を聞く会を、なんと日本でもてたことである。ロッシさんが5月の中旬から約1ヵ月の予定で来日されていることを知った守る会は、千載一遇のチャンスとばかり、果敢にロッシさんに申し入れ、小集会(出席者32名)が実現した。88歳のロッシさんは、ラーゲリ生活24年にも拘わらず、とてもお元気で、「強制収容所 - ソ連と北

朝鮮 - 」という私たちがお願いしたテーマで語り、質問に答えて下さった。「ラーゲリ註解事典」を読むと、北朝鮮の収容所の特徴は、1930年代のソビエトの収容所(ラーゲリ)にみな確認できることを教えられるが、しかしマルクス・レーニン型収容所はだんだんひどくなっていると言われたことは、とても印象的だった。すなわちベトナム、中国、北朝鮮の収容所はラーゲリよりもひどい。洗脳、衣食と労働の厳しさ、うそで固めてそれを信じさせること、この三つはいずれも1960年代後半から始まったという。ラーゲリが原型でありながら、北朝鮮の収容所はそれよりはるかに

ひどい - この両者の同一性と差異を見る視点は収穫だった。今一つ、ロッシさんのマルクス評を記録したい。「非常に賢い人。しかし賢い人は危険です。非常に賢い人が何かを考え出す、多くの人がそれを信じます。それを信じたために甚大な犠牲がでました。」このマルクス評にロッシさんのラーゲリ体験が凝縮されている。この日、韓国の市民連合から尹玄さんと金尚憲さんが海を越えて駆けつけた。またロシア語の名通訳久保田元三さんにも恵まれた。

北韓同胞の生命と

人権を守る市民連合の活動

去る 4 月「北韓同胞の生命と人権を守る市民連合」(以下「市民連合」と略す)は、海外から二通のうれしい便りを受け取った。一通はイギリスからで、もう一通はアメリカだった。イギリスから来たのは、北朝鮮当局に食糧を提供する時、政治犯収容所が存在するか否か聞いてほしいという「市民連合」の要請に対する、英国赤十字社 E.トーマス総裁の回答だった。

トーマス総裁はこの回答で、「本赤十字社国際部は、北朝鮮赤十字会とたゆまず接触しているが、貴下が書信で提起した状況に関して、はっきり聞いて見る」と明らか

にした。

アメリカから来たのは、刊行物の引用を許してほしいという「市民連合」の要請に対する、ミネソタ弁護士会の回答だった。ミネソタ弁護士会の担当者は、引用許可を知らせてくれ、「幸運と継続的な成功を祈る」というメッセージを付け加えてくれた。このような権威ある NGO が送つてくれた肯定的な反応により、「市民連合」の会員たちは大きく鼓舞されている。

また4月にはソウルで、97次国際議会連盟総会が開催された。各国から議会代表団とマスコミ関係者が集まる機会を通じ、北朝鮮の深刻な人権状況を全世界に知らせようと、「市民連合」は日本の「守る会」と

共に、要望書を作成、総会議長に渡した。
この要望書には北朝鮮の政治犯収容所の
犯罪性と、朝鮮人夫と共に北朝鮮に渡っ
て行った日本人妻 1,800 人の内、ただの
一人も日本の家族、親戚を訪問できない
ままという事実が指摘されていた。残念だ
がわれわれの関心表明は、議事進行に反
映されなかったようだ。

今年の 5 月「市民連合」は、創立一周年
を迎えた。そして「市民連合」は5月31日、
北朝鮮脱出者に対する法的保護義務をテ
ーマとした学術セミナーを、創立一周年記
念行事として開催した。著名な国際法学者
である金明基教授がテーマ論文を発表
し、日刊紙論説委員、北朝鮮脱出者、国家

公務員などが討論に参加した。

韓国の憲法によると、北朝鮮も韓国の領土であり、かの地に住む住民も韓国国民なので、北朝鮮脱出者に対する一次的法的保護義務は韓国にあり、脱出者が難民として滞在中の外国に二次的法的保護義務があり、国連難民高等弁務官に三次的法的保護義務があるというのが、テーマ論文の要旨だった。(このテーマ論文と討論内容は 生命と人権 第5号に、付録として掲載する予定である。)

6月には、明石康国連事務次長が、洪水被害状況を視察し、また食糧支援問題を協議するために、北朝鮮を訪問した。「市民連合」は昨年6月以来、食糧を支援する

機会を利用して、政治犯収容所が存在するか否かを北朝鮮当局に聞くように、明石事務次長にくりかえし要請した。それで「市民連合」は彼に三回目のまったく同じ趣旨の要望書を送り、彼が帰路ソウルを訪問するといふので、「市民連合」代表団と逢うことを要請した。しかし彼は日程上の理由で、私たちの面談要請を拒否した。

ロシアで身を隠している北朝鮮脱出者への支援は、依然と続けられている。彼らを保護している朝鮮系ロシア女性の要請で、何冊かの月刊誌を国際小包で郵送した。また脱出者たちから手記が送られてくると、その原稿を月刊誌に掲載し、原稿料を彼らに送る態勢が最近備わった。遠くな

く、このプログラムも実践段階に入るだろうと予想される。

「国内北朝鮮脱出者との対話の集い」が4月以後、毎月一回ずつ開催されている。北朝鮮同胞の生活像を体系的に研究すると同時に、彼ら脱出者が韓国社会で暮らす中で、抱く苦しみをもう少し深く理解することに、この集まりの目的がある。脱出者の社会適応を専門的に研究する数人の学者が、この集いをリードしているが、脱出者たちの反応も大きい。

また北朝鮮での生活に関する脱出者の著書を販売したり、外国語に翻訳・刊行し、脱出者の生計の足しにすることも、この三ヵ月の間に少しずつ進行している。

